☆帝国主義国、後進国、労働者国家
三ブロック階級闘争を
世界プロ独―世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟

6月15日
第259号
編集発行人 井村和夫
一部 50円
購読料20回1300円（〒共）

戦旗

戦旗社
中央戦旗社 TEL 03 (765) 8551
東京都本所郵便局私書箱44号

八派共闘の解体・再編を押し進め

蜂起―臨時政府樹立の大道を歩め！

関西地区叛軍 三里塚現闘を準備せよ！

駒井野1、2地点、第二次強制収容に

人民の大逆襲を確立

＜Ⅰ＞八派共闘の人民戦線左派への転落

「われわれが労働者階級の教育と組織のために、さらにさらに多くの活動をしなければならないことは疑いないが、しかし、いまもっぱら問題となっているのは、この教育とどこの組織におくべきか、ということである。労働組合か合法的協会におくのか、それとも武装蜂起や、革命軍と革命政府を創作する仕事におくのかこのどちらかによっても、労働者階級は教育され組織される。もちろん、このどちらも欠くことができないものである。だが、いま、当面の革命では、おおよそ問題は、労働者階級の教育と組織の重心がどちらにあるのか、前者にかそれとも後者にかという点に帰着する。（レーニン「二つの戦術」）

われわれは、4・28派第会の実現によって、武装蜂起―臨時革命政府樹立にむけた闘争の準備段階が開始されたと。この段階を向いうる党は、非合法軍事組織としてしかありえないことを明らかにしてきた。確かにいまだ、この闘争の段階は初期的であり、八派共闘として六〇年代の反改府闘争は推進されており、当面この過渡期は、非合法党による蜂起と、反政府派―人民戦線左派への分裂前の彼等の

中四国地区に体系的非合法党建設、混迷する諸党派再編に着手

岡山地区反帝戦線

全国の同志党神速！

蜂起を組織する体系的非合法党建設に向けて一切の活動と戦闘を集中している岡山地区反帝戦線より党員設の親段階を報告します。

12・18共産同中共政治集会によって切り開かれた「スターリン主義打倒、反スタマ、ルクス・レーニン主義復権」の地平を踏え、蜂起一臨時政府樹立を鮮明にした単一党建設へ向けて、2月以降岡山地区におけるブント系諸勢力潮流の分散性、地方性と反撃・日向一派などの軍事反対派潮流、赤軍派的傾向を克服すべく政治的、イデオロギー的、組織的基礎に関する密集した論争を組織し、69年7・6以降の党内論争を「党の革命」「党の武装」としてブント12年の総括をかけたものとしてとらえるなかで、現在体系的非合法党建設をめざしている。全国の同志諸君とともに奮闘していくことをきわめて強く呼びかけます。

約2カ月にわたる論争を経て、軍事を組織し、蜂起の陣型を構築する政治的、イデオロギー的党建設をめざす岡山地区反帝戦線は、2派止揚・8派解体、蜂起を実現する単一党建設の闘いとして4・28清水合集会に対する意思統一を確認に行ないの名の部隊で清水合集に結集した。

同時に岡山の地では、これまでのブント系諸潮流とは比べものにならない強固な部隊としてわが反帝戦線が登場した。岡山ではこれまで中核派、共労党の8派政治を中心に闘いが組まれていたが彼らにあっては、六九年三月決戦以降、六〇年代後半の「国際主義」組織された暴力」の闘いが「党の革命」「党の武装」を不可避とすることに無自覚であるがゆえに混迷し、随闘争から大きく後退しはじめている。六〇年代後半の階級闘争総括を、政治、軍事、思想組織の全領域にわたって根底的になしえてきた二・二八集会の一回闘争地平を踏えた我々は、四・二八以降8派の諸者（中核派、共労党、解放派を対象とする）との党派闘争を開始し、彼らの中の最も革命的な部分の組織化を図ると闘争利的に押し進め、5・9沖縄闘争において、わが反帝戦線は最も強固な隊列でもって登場したのである。蜂起を実現する単一党建設の任務はさらに一歩高い段階へと突き進んだ。5・16沖縄闘争に結集した労働者、学生、市民は、わが反帝戦線代表の発言に聞き入り、集会はしずまりかえったのである。これに対し8派の諸者は我々の発言に全くの無対応かないしは我々の「蜂起の陣型を構築する非合法党建設を」の大胆な主張に対して、「蜂起をやれるならやってみろ」などといった薄汚い批判しかなしえず、まさしく人民戦線左派への転落を自己暴露したのである。

集会において、政治的、思想的に圧倒的に主導権を発揮したわが反帝戦線は動員においても最もよく組織された強固な隊列でもって我々の登場に恐怖した極動隊の必死の弾圧をものともはねかえし、終始戦闘に貫徹した。

5・19沖縄闘争において、大衆の眼裏に反帝戦線の赤ヘルメットをくっきりとやきつけた我々は、非合法党建設の大道をさらに前進

（岡山安部隊）そして能勢ミサイル基地設置粉砕闘争――臨時革命政府樹立のため、日夜、敵ブルジョアジー、権力の包囲のなか、革命的献身性をもって闘い抜いている全国の兄弟たち！

戦士達！　そして東京の活動家諸君！　60年安保・「京都地区反戦」として京都の地において反戦闘争をはっきりと階級闘争として担ったわれわれは、われわれの到達地点の限界を総括するなかから「蜂起の党―軍建設」を提起し、そして、その作業を開始したことは、もちろんのこと、京都地区反戦の70年の闘いは、京都における反革命軍事体系の一環として存在する、陸上自衛隊、桂駐屯地、大久保駐屯地、宇治（自衛隊）、舞鶴（海上自衛隊）、八尾（航空自衛隊）、奈良（自衛隊）――米軍（内部）内部にまで及びつつあるのである。

プロレタリアートの世界史的総決算のため、蜂起―臨時革命政府樹立のため、日夜、敵ブルジョアジー、権力の包囲のなかから、革命的献身性をもって闘い抜いている全国の兄弟たち！

戦士達！　そして東京の活動家諸君！　60年安保・「京都地区反戦」として京都の地において反戦闘争をはっきりと階級闘争として担ったわれわれは、われわれの到達地点の限界を総括するなかから「蜂起の党―軍建設」を提起し、そして、その作業を開始したことは、もちろんのこと、京都地区反戦の70年の闘いは、京都における反革命軍事体系の一環として存在する、陸上自衛隊、桂駐屯地、大久保駐屯地

（大阪支局）全国のAIFの同志に「戦争」「戦争者諸君」の報告において、われわれは、5・19京都円山公園石段下解放区闘争を鮮明にしたように、5・19沖縄闘争の戦闘的実力闘争に結集したとこの国家権力は、「まだ実力闘争を……」というネ安から、5・19闘争不当逮捕者の30個全奪還を勝ちとったのであった。そういった大衆視点をはねかけ、われわれは全体からの統一行動に参加したのである。

我々の諸活動の報告は次の通りである。

我々京都地区反戦は今年1月において、地域調査を我々の全部力を傾注し、政治軍事共闘を構築する政治闘争を通じて、日本帝国主義の軍事的侵略に対する反帝闘争を体系化し、またそれに対して、軍事的侵略に対する反帝闘争を展開する。

我々は、「戦争」「戦争者諸君」の報告を通じて、「戦争」「戦争者諸君」の報告を通じて、「戦争」「戦争者諸君」の報告を通じて

背教者＝日向集団の沖縄闘争「論」批判（その2）

共産主義青年同盟

打倒・中国＝民族解放戦争との結び

はじめに

現代過渡期世界における労働者階級は、日帝型主義のあらゆる変種と自分の断固たる闘争によらないではすませない。まして、我々が「派止揚＝八派解体＝蜂起」臨時革命政府をめざす単一党建設の闘いを開始した現在では、日和見主義者などの反動的攻撃を強めることはあれ決して弱めることはできない。

七一年四・二八沖縄闘争が画した階級闘争の転換は、はたはだ微力であり、我々の目的からすればその端緒であったとしても、国際的革命戦争に打って出るための第一歩であり、次の課題への飛躍のためには不可避な過程であるのである。そして、何よりも敵アルジェリアーに対する党の、軍の政治的攻撃の高揚＝世界単一のプロレタリア独裁樹立の闘いへ向けつつ、集団・・諸派の歴史的、全人類的解放の闘いへ向けつつ、我々の闘争を深め、我々をしてまず首尾一貫させ、我々と闘う帝国主義権力とスターリニスト権力を打倒する。全世界の労働者階級、被抑圧民族民衆の共通の戦略目標＝世界単一のプロレタリア独裁樹立の闘いへ向けつつ、敵に屈服する一切の「プロ」の「諸派」の歴史的、全人類的解放の闘いへ向けつつ、我々の闘争を深め、我々をしてまず首尾一貫させ、我々と闘う帝国主義権力とスターリニスト権力を打倒する。全世界の労働者階級の支持と統合を深め、我々の闘争を国際的革命戦争へ高めるであろう。

我々の闘争を国際的革命戦争へ高めるであろう。

四・二八闘争のもたらした政治的意義

四・二八闘争は、五・一九、五・三〇の戦闘をへる中で、四・二八闘争によって画した階級闘争の転換が、確実に全国的波及をもたらしつつ進行している。とりわけ、ブントのメンバーは、我々の党建設のテンポの速さ固めを急務に要求する程の党派再編へ向けた動向の現象の中に把握されなければならない。

主要には、革共同中核派の八派共闘の再編＝中核を八派共闘の党として代表するべく、中核派による八派共闘の一元的掌握である。

中核を中心とする八派再編の動向は、沖縄闘争のスローガン、政治方針の対立、発言問題、戦術問題を直接的契機としつつ、東京戦闘における社青同解放派との対立（都落問題）、そして、フロントの解放派への接近とである。また、関西問題にあっては、「八派解体」勢力に対する解答として「八派止揚＝八派解体＝蜂起をめざす単一党建設の路線」を提起した我が同盟と、中核派＝八派内中核外諸派＝ノンセクトの対抗の奥にある政治問題の対立として把え返さなければならない。とりわけ、政治問題の対立の現実的設定は、四・二八沖縄会の成功、③沖縄返還闘争を中心にした政治闘争とともなっての政治闘争の分解、対立、にある。

だから、八派共闘の解体的傾向鮮明化は、主体的な我々の体系的非合法党建設に対する我々の闘争の中核的問題である。

これらの現象的事実は、主体的に蜂起をめざす単一党建設をする我が同盟と、中核派＝八派内中核外諸派＝ノンセクトの対抗の奥にある政治問題の対立として把え返さなければならない。とりわけ、政治問題の対立の現実的設定は、①四・二八沖縄会の成功、②沖縄返還闘争を中心にした政治闘争とともなっての政治闘争の分解、対立、にある。

また、関西問題にあっては、「八派解体」勢力に対する解答として「八派止揚＝八派解体＝蜂起をめざす単一党建設の路線」を提起した我が同盟と、中核派＝八派内中核外諸派＝ノンセクトの対抗の奥にある政治問題の対立として把え返さなければならない。とりわけ、政治問題の対立の現実的設定は、①四・二八沖縄会の成功、②沖縄返還闘争を中心にした政治闘争とともなっての政治闘争の分解、対立、にある。

だから、八派共闘の解体的傾向鮮明化は、主体的な我々の体系的非合法党建設に対する我々の闘争の中核的問題である。

これらの現象的事実は、主体的に蜂起をめざす単一党建設をする

佐藤訪韓阻止闘争に起て

日米アジア人民の国際的帝軍解体闘争の第一歩として闘い抜け

先進国武装闘争の新たな地平を切り開き、内戦に世界革命闘争への飛躍を担いうる主体に、みずからの党派をいかに鍛え抜けるかが、過渡期世界の先進国党の問われている普遍的課題であり、一切の闘争の原則的基盤から闘いの値を問われており、権力闘争との戦略との原則的一致が具体的に問われているのである。

したがって、個別闘争として沖縄闘争を組織せんとか「ソビエト型組織すべしのための」行動的発起における任務等としてはもとより、過渡期世界の先進国党の問われている普遍的課題であり、一切の闘争の原則的基盤から闘いの値を問われており、権力闘争との戦略との原則的一致が具体的に問われているのである。

沖縄・自治闘争においても、党はこの原則的基盤から闘いの値を問われており、権力闘争との戦略との原則的一致が具体化されねばならぬ。具体的に問われているのである。

したがって、個別闘争として沖縄闘争を組織せんとか「ソビエト型組織すべしのための」行動的発起における任務等としてはもとより、過渡期世界の先進国党の問われている普遍的課題であり、一切の闘争の原則的基盤から闘いの値を問われており、権力闘争との戦略との原則的一致が具体化されねばならぬ。

即ち、帝国主義軍隊解体という現代革命の核心を帝国主義の侵略革命と世界革命闘争という戦略の内実として、ここに沖縄闘争を集結することである。

この戦略の核心として沖縄闘争は、帝国主義軍隊解体闘争―その実体としてのアジア侵略反革命武装軍隊解体闘争と結合した闘争としぼりあげられねばならない。

党在の八派の沖縄スケジュール闘争は、中核派の「沖縄奪還論」に引きずられた、戦略論と無縁な、権力との攻防戦を見失ったピントはずれの大衆動員闘争となっている。

たしかに八派政治は、そのスケジュール提示の下に、大衆の自然発生性を、宮の次元で結集しつつ、組織内の不満―その内実は権力闘争を進めた主体、先進資産階級拡大方針への反発である―をスケジュール闘争の枠内における戦術的エスカレートで組織撹乱的に発散させようとしている。

しかし、かかる八派スケジュール闘争の枠内での戦術的エスカレートは、それ自体、現代の権力と党と隠蔽の攻防闘争がプロ独派に問っている質に何等応えるものではない。

だから、党戦線主体が組織的に羅得する値から見ても空しい組織拡大手段の内部不満の発散に終っているのである。

政治パクロの象徴形成としても、日帝の帰帝反革命を主軸における日米反革命の間題として把握しえないが故に、佐藤訪韓と日韓、自民党主導型事外交の軸としての自衛隊派兵の問題が象徴され、帝国主義軍政解体闘争―自衛隊沖縄派兵阻止闘争・アジア侵略反革命の武装解体闘争へと焦点を合わせるべきである。

ここに位置すべきものである。

組織内不満の外化であり、先進現代資産階級の封じ込まれた破産の焦点である。

現代サンジカリスト―大衆反乱主義の大衆的戦闘性も、封じ込まれた軍事の壁を突破する方向性に応えるものではない。

そうだ！沖縄闘争の焦点が完全に外化してしまっていること、反革命闘争の壁が何一つ突破出来ないことと、この矛盾は本質とが問題である。

この直面する現実、プロ独派が追い込まれて敗られている自己の敗北が帰結した行り込められた軍事の壁をいかに突破するかをわれわれは提起しているのだ！

だから、六九年十一月安保決戦の冷厳な総括が、羽田闘争を担う党派の核心的質を、今、突きつけているのである。

スケジュール沖縄闘争と羽田阻止という色あせたピンボケ政治無点の羽田闘争は、正に六九年安保決戦の政治的・軍事的質を総括せずに、六九年安保決戦を、「無自覚の大合唱は、はかなくも義魂辺万才と参議院議事堂の遠吠にかき消されてゆくだけなのである。

唯一、われわれのみが、ドス黒い鉄のスクラムを横力に突きつけて、四・二八以来の闘争を戦略的連続闘争として闘いえたのである。

蕨馬自衛隊基地解体闘争（五・一九）―防衛庁闘争（六・一）―新干央工業解体闘争（六・一五）―佐藤訪韓阻止闘争（七・一）である。

即ち―

先進国武装闘争の火蓋を自衛隊の沖縄派兵直接攻撃として切って落とすために、明確な政治焦点に武装闘争を集中させ、帝国主義軍隊解体闘争を集中させ、帝国主義軍隊解体闘争を通じて現代革命の核心に直進するために、われわれは―

●官僚反革命の尖兵、蕨馬第一師団とアジア侵略・反革命の尖兵部隊、●新干央工業に反撃の砲火を浴びせよ!!

のスローガンをかかげて、唯一、政治焦点に武装闘争戦略討議と、プロ独派が問われている軍事組織の質を大胆に提起してきたのだ。

さて、六月下旬の自衛隊幕僚長との三千人大衆糾弾集会は、三千人の大衆動員闘争として、七月一日には佐藤首相が朴大統領と、翌日佐藤首相が朴大統領と、翌日佐藤首相が朴大統領と、翌日